

は無い日の上に就て考へて見ても今日は成程現在であるが昨日からいへば未
 来て明日から眺むれば過去である、かくの如く今日は昨日の明日にして明日
 の昨日は今日である、されば三世とか遠近とかは畢竟吾人相對の見知より作爲
 せる處であつて無限の時間無限の空間には何等の區畫もないのである、故に古
 人も盡天地を撮じ來れば粟粒米の如しと云ひ又一微塵裡に寶王刹を建立
 すとか一莖草を拈じて丈六の金身と爲すとも云はれてあるのである、此は決し
 て禪家の教法螺ても虚言でもない宜しく實參實究して此理を徹照するのが參
 禪者の最も肝要なる處である。

極小は大に同じ境界を忘絶す

此二句に於ては前句についで、夫小の相は畢竟吾人の見解より成立するもの
 にして其實體の存せざることを述べらるるのである、境界とは境はサカイ界は
 カギリと訓じて封疆限畫の謂である、大と小との體相の異なる處が即ち境界
 である、而しながら果して此大と小との間に確實に境界を附することが出来る

てあるうか、此大小の二者の間に境界ありと見るは吾人が無始劫來より習慣上
 の分別念想から來て居る幻影であつて法の本體には本より斯くの如き差別の
 自性は無いのである、畢竟大小と云ふも虛玄の大道の現はれたる現象界の上に
 附したる一時の假名である、彼れと此れとの二物對待したる時始めて成立する
 に過ぎぬ、針と棒と比較すれば針よりも棒は大であるが更に此棒と丸木に比べ
 て見れば棒の方が反て小となる、斯くの如くして大に大相の一定して見るべき
 性質なく、小に小相の眞實相もないのである、殊に法界一如の理體より見れば大
 小共に一空無相ぢや、小の小を極むれば遂に無相に歸し、大の大を極むれば亦遂
 に一空に復するは自然の理である、併し小の小大の大を極めずとも大小そのま
 まが一體不二ぢや、故に此虛玄の大道無相の心體を識得すれば大小長短自他古
 今の境界を絶滅するに至る、之を境界に忘絶したと云ふのである。

極大は小に同じ邊表を見ず

前二句に於ては小の大に同じきことを述べられたが、今は大の小に同じき事と示

されたのである、勿論極小の大到同じきを知れば極大の小到同じかるべきは自明の理ではあるが、更に此二句あるは對句の都合でもあり、且つは古人の親切丁寧の垂誡たることを知らねばならぬ、邊表とは邊は邊端と熟字してハシのこと、表は表面と熟字して中央の意である、さて世間一切の物多くは彼此の物を區別するに大小の比較を以てする、畢竟するに大小は物の二ツ以上ある場合之を區別するの辭ぢや、然るに其大小を各其究極の處まで推究して見れば遂に其邊際を絶するが故に大に大の相なく又小に小相はない、此形相なき本際の處を指して強ひて同と云ふたのぢや、而して此本際の處に到達し去れば大小一如なるが故に中央の邊端のと云ふ區別は立てられぬ、恰も虚空の内外なきが如きもので、洞然として邊際方處を絶し、無相にして周遍せざるなき事は前の圓同太虛無缺無餘の處に述べし通りである、かく虚空の如く表邊なく廓落として大小の相を絶して居るのであるから、縁に隨ひ物に應じて或時は大に現はれ、或る時は小と現はる、然かも大なればとて餘ることなく、小なればとて缺くる處もない、皆其分に應じて箇々圓滿無缺である、此理を會得すれば、盡十方界沙門の一隻眼とも點

して行くことが出来る、かく云は、人そは或は理論ぢや、理窟ぢや、實際とは没交渉であると思はんも何ぞ知らむ、人々各自本來圓滿具足せる本心妙心に向つての直指の法門であつて、吾人の日常云作轉動か直に大小の相を絶し、人々天上天下唯我獨尊、境界もなく表裏もないのである、故に古人も平常心是道と云ひ承陽大師は直下承當と仰せられたぢや、かく觀し去り觀し來れば天地間の萬事萬物悉く妙心の脱體現成にして大なく小なく長なく短なく遠近なく古今なく今日吾人の四大五蘊の「マ」が證を待たず修をからず況や他に何等の妄想すべきなきに至らば、日常の喫茶喫飯、運水搬柴、起居動作、共に之れ神通妙用、遊戲自在の活消息、王三昧である、若し夫れ此理を會せずして一步を過らば、果然として當面に蹉過し去りて、蓋し三十棒を免かれることは出来ぬ。

有即ち是れ無即ち是れ有

前に於ては大小の相は畢竟吾人の見解より起る分別にして、元來至道の上には、かゝる相對的なる各別の法の存するにあらざることを述べられたが、此處では

更に有無の兩頭について一多の關係を反覆して示されるのである。其表面より見れば大小といひ有無といふ其語は自から異なるも其宗意に至つては同一義にして別に詳かに説明する迄も無い大凡十法界と現はれ来る處の一切の諸法は歴然として吾人の眼前に羅列するも、そはたゞ一面の觀察であつて全面的觀察ではない。故に更に其全體を大觀すれば至法界漠然として一物の認むべきなく實體の存するものはない。即ち山河大地日月星辰人畜家屋草木昆蟲に至るまで皆なこれ因縁假和合の幻相にして因縁盡くれば其相は自から滅盡して空に歸す。されば吾人が目して有と稱するも決して實有にはあらず。さりとして諸法は面あたり歴然として吾人の眼前に横はつて居るのであるから之を無なりとも言ふべからず。去れば吾人の目して有とする處の諸法は皆な是れ無性の妙心なり。顯現したる影像ぢや、而して其法相の上には千萬無量の異なりありて其實體は畢竟無自性不可得である。無自性不可得なりと雖萬法歴然として毫も味まざる處、是れ即ち無の儘が有である。故に洞門に於ては正中偏、偏中正と説き、臨濟下に於ては「在途中、不出家舍、在家舍、不離途中」とも云ひ、心經には色は空に異らず

空は色に異らず、色即ちこれ空、空即ち是れ色となり、承陽大師は「悉有の有、曷ぞ無の無に、闢法せざらむ」と仰せられてある。若しそれ斯くの如く了解する時は有と云ふも有相に執着することなく、有即ち之れ無、又無と云ふも空見に隨することなく、無即ち是れ有である。然るに凡夫は有と云へば有相に着して無の實性を知らず、無と観じては無に着して有の真相を解せず、有無互に相執して遂に法を本體は真空にして妙有なることを了却せざるが故に、長へに相對の妄見に捕へられ、無繩自縛し、苦より苦に沈淪し、永劫解脱の域に達することの出来ざるは、實に痛嘆に堪えざる處である。これに就て一つの面白い話がある。昔或人が婚禮の席へ招かれて列したが、下戸の爲めに衆と共に酒を呑むことが出来ない。只だ他人の甘ま氣に飲むを眺めて居つた。そこで主人も氣の毒に思ひ、金米糖を盞に入れて下戸の人にと出した。これはよい物を出してくれたと喜びながらポツリポツリと酒のむかほりに其金米糖を食べて居つた。熱々と盞を見るに金米糖が可なり、澤山入れてある様だ、併し如何に下戸とは云へ之れを婚禮の席で餘りに喧ましき程音をたて、澤山食ふのも妙でない。さりとしてこれを殘し行くも何とな

く惜しい様な気がする、一層のことソツト一握りつかんで袂へ入れて歸つて自分の家でゴツソツリ食べるが上分別と一人合點して壺を引きよせ手を其中に入れ、掴める丈掴んでさてこれによしと手を出さうとしたが壺の口は生憎に小さいから何うしても金米糖を掴んだ拳を抜き取るこゝが出来ぬ、一生懸命になつて抜かうとしたが只手が痛い計りて何うしても抜けては來ぬ、マゴクして居る中に隣席のものに見付られ貴方何うなされましたと問はれ果ては客の手が壺の中へはいつて抜けぬといふので家内中の大騒ぎとなりました、主人は非常心に心配し「ナニニ其壺一位碎いてもかまいません、御手に怪我があつては……」と云ふので頓て道具を以て其壺を碎いて見ると、こはそも如何に金米糖を手一杯ウシと掴むて居たので一同の大笑となつたと云ふことである、こは金米糖であるから、さも卑しいやうに聞えるのであるが、世の中には有とか無とか大とか小とか悟とか迷とか云ふ物を掴み込んで反て自ら獨り悶き苦しみ直にを放下する時、身心脱落、脱落身心なることを知らざるものが多いのである、禪者のみならず苟も修養に志す者は能く注意して他の笑を受けざる様にせねばならぬのである。

ぬのである。

若し是の如くならずんば必ず守ることを須ぬざれ

前に於て述べたるがごとく有は有の儘にて是れ無しにして有も遂に有といふべからず、無は無の儘にして是れ有として遂に無といふべからず、所謂無即有有即無である、此理を體得して初めて有無一貫の真宗に妙契することか出来るのである、若し此の如き妙旨を了達せざる時は或は有に墮するか無に偏するか何れかの一偏に枯着して自由を失却して本分の活作用を現はすことは出来ぬ、しや又有は無の有である、無は有の無である、と二ツながら其蹤跡を混絶することを得るも其混絶したる處に尻をすえて其混絶の境に執着する時は是れ亦至道を保任するに堪ゆべき那人と稱することは出来ぬ、若し夫れ有無一貫の道理に妙契して毫も有無の兩端に束縛せらるゝ事なきに至らば常済大師の「嬰兒を養ふが如く、一眼を守るが如く、有無一片に打成し、根境一如に練磨せば、主人翁と時相見し無位人と刻々對談して毫髪も相離れず、寸絲も相隔つることなからん

と云はれたるが如くに至ることを得るのである。近來禪が一種の流行物の如くになり、禪を口にせざる者は時世後れの如くに考へ、何禪師に參得して、何々の提唱を聴き、何々の公案を透破したといふて誇つたり、又少しく眞面目に修養をした者は、我は禪學に參じたる禪者なるが故に、普通世俗の輩と其行動を異にせねばならぬと思ひ、且つ禪の禪たる處は奇抜とか風流とかと云ふ處に存するか如くに考へて、故らに奇行を街ふ人がある。斯かる人は古への一休禪師などを標本にして、常識に背ひたり、人事を輕蔑したりする様な振舞を敢てするが、之は大なる誤りである。果して禪なるものがかゝる物であつたならば、禪は實に社會の害毒とならざる迄も、世に於て些の益なきこととて、宗教として社會に禪を存するの必要もなく、又決して一般人に勸むべきものではないこととなる。併しそは全く禪の眞面目を解し得ざる底の一種の禪病禪弊にかゝれる人である。決して非常識にして奇抜なる處や奇風流なる處に禪の眞意はあるにあらざる。吾人の日常運作轉動を始め、各自其業務に服して忠實に之を努むる處に、禪の眞面目を伺はねばならぬ。一切の所行一舉一投足までが天下の則となり、百世の師ともなつて

こそ始て禪行であり、禪の所作と言はれたのであり、又日々の行持以外に一種特別なる禪の行持はないのである。之を誤りて佛法と世法出家と在家との兩者を隔別し、一偏に墮在したり、或は妄りに有を固守し、妄りに無に偏估すべきではないのである。瑞巖の彦禪師は方丈に在りて常に自ら主人公と喚び、復自ら應諾し、握々著他時、眞日人の嘴を受くこと莫れと云ふて、眞義なる修養をせられた。王陽明と致良知の功は、即ち佛氏の常惺々亦是れ常に他の本來の面目を存するのみと云ふて居る。世人多くは外境の嘴を受け、又は見聞知覺に瞞せられ、知らず知らず本來の面目を失却して居りはせぬか。楞嚴經に所謂一切衆生無始より以來、已れに迷ふて物となし、本心を失ひ、物の爲めに轉せらるゝとあるが如く、物に轉せられて居る中は、兪角有は即ち是れ無と云ふ境界に達することは出来ぬ。故に同經に、若し能く物を轉せば、即ち如來に同じとある様に、能く萬物を轉するに至らぬは、有無一貫の大道に妙契したる人と稱することは出来ぬ。能く物を轉するとは大道を以て自己として、萬物をして大道を莊嚴せしむることぢや。

一即ち一切、一切即ち一

前には有無混融の妙理を述べられたのであるが今此二句に於ては一多圓融の玄旨を説示せられたのである。雪竇和尚は「一に多種あり、二に兩般なし」と云はれたのも此道理である。王陽明が「一真一切真」と云へるも此道理の一斑を見破したものである。萬法は一心に歸し、一心萬法に入つて相即融通したる處が一即一切、一切即一である。元來一切諸法は是れ一心の露現にして、一心の外に諸法なく、諸法を離れて別に一心はない故に。上士は一決して一切了すと云ひ、一性圓かに一切の性に通じ、一法徧く一切法を含むとも云はれてある。而しかく云は、凡夫の多は疑を發して云ふであらう。一と二と比較すれば、一は二より少いし、二は一よりも儘かに多い。之は否定すべからざる事實ではないか。此二者は何うしても同じいとは言はれまい。此は即の理を未だよく了解せざるによるのであるから。即の一字によく注意せねばならぬ。即ち一心即萬法と云ふも一心と萬法と相和して同一なりと云ふ意ではない。即はソツクリそのまゝの義であるから一

がソツクリ其まゝ萬法である故に一に偏せず、萬法がソツクリそのまゝ一であるから萬法に迷はぬ、一と一切と互に相即圓融して互に犯すことなく、全く數量を超越して居ると云ふ意味で即の字を用ひられたのである。故に洛浦は「一塵纒かに起れば大地全く收ると云ひ、永嘉大師は「一地に具足す一切地」と云はれてあるのも要するに一即一切、一切即一の的意を述べられたのである。

但能く是くの如くなれば何ぞ不畢を慮らん

さて信心銘の講話も大分進んで来て終りにも近くに近づいた。以上述ぶる處に於て信心の要は大概述べ了り最早云ふべきことは粗ぼ云ひつくし説くべきことは幾んど説きつくした様なものである。故に但能く是の如くなればとは上來述べ來つた處を一々よく了解することが出來たならばといふこと、何ぞ不畢を慮らんとは最早何等心配するの必要はないぞと云ふ御語ぢや、不畢は大事を了畢せざるをいふ、乃ち凡夫地に在るをいふたのである。併し此れは信心銘全篇の上から見ての話であるが、若し之を前句と關連して解釋すれば一多の關係は相即

圓融無碍であるから此理を透得する時は宛轉自在にして行く處として可ならざるなく到る處として適せざるはない、これか即ち眞正の知見を開き得た者と云ふべきである、此地に到達すれば最早參學の大事了畢である、併しかく云へばとて大事の了畢を以て學校でも卒業して免狀でも貰ふ様なこと、思ふては又是れ大錯ぢや、若し本分の眼より見來れば縦ひ透得するも悟迹を忘するの修行を忽にして吾れは既に向上の一路に到達せり、佛家の一大事を了畢せりとの知見を存して自ら珍重する時は猶ほ是れ肚裏幾分の煩惱の熱氣妄想の餘炎が殘存する者にして眞箇の信心を決定する底の人と稱することは難い、非思量の端的には了畢すべき大事と稱する一物も無いのである、須く迷悟の兩邊を超越し中間にも留らず、無所住の地に躡入して至道の全面目を徹見し確信することが肝要である。

信心不二不二信心

此の篇の初に於て信愛と云ひしより或は遠順動靜寂亂得失迷悟是非等の名相

を以て嫌擇の根據地を摘出し、最後に大小一多と云ふに至るまで叮嚀反覆して之を開示せらるゝこと恰も慈母の愛兒に乳房を哺まするか如くぢや、而して世間出世間の上に現はれて居る所の一切諸法を或は道德上より或は理論上より或は實賤上より言を換へ字を變じて説きつくされたが、其終りに至つて百四十九有餘句五百七十餘字の大主意を此信心不二不二信心の二句に結歸せられたる所のもの、三祖大師が此篇に信心銘と題せられたる御精神も全く此二句に存するのである、されば此二句は最も肝要なる全篇の眼目であるから特に注意を拂つて審細に參究せねばならぬ、最も此信心と云ふ事に就ては最初題號を釋する所に於て叮嚀に述べた筈であるから夫れをよく參照してもらひたい、大凡佛道修行上の專要の一大事は實に此信心にあるので、楞嚴經には常住の理を信するを名けて信心と云ふと云ひ、涅槃經には信心は佛性なりと云ひ、承陽大師は佛果位にあらざれば信現成せず、おほよそ信現成のところは佛祖現成のところなりと仰せられてあるのを見ても如何に信心の大切なることが分かる、信心とは申すまでもなく自心が自心を信するので更に進一步すれば一切衆生は本來成

佛本來解脱ちや聲聞緣覺菩薩佛の四聖も空中の華地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六凡も水中の月實際の理地には一塵を立せず凡聖迷悟毫髪も差異あるにあらずして都盧平等なるが故に同異の論量をも絶して居る、一草一木も編法界の光明體一進一退も無盡藏の功德聚なることを確信して従前の狐疑が一時に淨盡して雲霧晴れ盡くして皎月天に輝くが如き境界に達したのが不二の信心ちや學人若し信心不二の理を會得するも却來退歩して不二信心の地に至らざれば未だ佛々祖々證契即通の妙法を單傳したと云ふことは出來ぬ、參同契に竺土大仙心と云ひ寶鏡三昧に如是の法と云ふも此信心不二不二信心の意に外ならぬのである。

言語道斷去來今にあらず

言語道斷とは言語を以て云ひ現はすべき道の斷えたるをいふ、不立文字教外別傳と云ふのも同じことぢや、前句に示されたるが如く回光反照して信心不二不二信心の的意に到達し佛と我と第二面なき所謂入我我入の端的は言語の道も

斷へ分別の根も枯れ、縦ひ佛祖出て來るとも一語の發すべき無し、乃ち四十九年一字不説ぢや、故に口にあれども牆壁の如くにして一切の心行も用途を失却し心あれども木石の如くになる、而して是の如き信心を具足したる那人ならば常に口壁口牆心木心石にして日用の運作が鳥の空に遊び魚の水に戯るが如く、脚下線斷へて歩々自在なる自受用の王三昧となる此の境界は到底心意識の測度し得る處ではない、されば十世古今當處一念にして過去とか現在とか本來などと云ふ稱量に涉るべきものでもない、即ち三世心不可得である、一切衆生蠢動含靈は其實本來より此大道を行持し、本際より大解脱に安住して居るのであるから、若し一度此地を信得及せば其信心の妙味は佛眼も見れども見えず、天魔も窺い得ざる處のものぢや、而も此信心は宇宙の至道の露現するを以て横に十方沙界に編滿し邊際なく、堅に三世に亘りて究極する處なく、無始無終常住寂滅であるから去來今にあらずと云ふたのである、此れ則ち三世諸佛歷代の祖師の密付されたる一大事の佛心印である。

抑も三祖大師が信心銘一篇を著はされたる御精神の存する處はその當時達磨

大師の宗風は未だ世に流通するに至らず、一類義解の徒は理路に走りて實行を等閑にして胡亂に禪を唱へ唯だ知見をのみ逞ふするの輩が次第に加はりて眞の祖師禪、如來禪を誤やまる者多々なるを憂ひて此れ等を警誡し佛道の要徑たる正信心の典型を示されたのである。其説示の親切丁寧なること恰も老婆の子孫を愛するが如く又霽月の萬水に映するが如くして行き渡らぬ隈もなき有様である。されば吾人は此講を終るに臨み益々三祖大師の法恩の鴻大なるを感謝し奉り、よろしく學義解の爲めに誤まるゝ事なく實參實究して三祖大師の眞意の存す處を徹證して金剛不動の信心を獲得して無難無易の大道を冷暖自知する底の時節を現成せねばならぬ。

通俗信心銘講話 畢

明治四十五年五月十四日印刷
 明治四十五年五月二十八日發行

正價金五拾錢

東京市芝區西久保廣町十番地

編輯者 兼 發行會 禪書刊行會

代表者

久内大賢

東京市芝區西久保廣町十番地

印刷人 吉山清一

東京市京橋區築地三丁目二十二番地

印刷所 國光印刷株式會社

不許複製

發行所

東京市芝區西久保廣町十番地
 電話芝三三〇一 振替東三三五

一喝社

西有禪師題字 日置老師題頌 岡田摘翠師著
森田禪師題字 新井老師校閱 井上哲博士跋

再版 禪と人生

增補 正價金七拾錢 送料金八錢

前曹洞宗大學教授淺野斧山師著

再版 禪と病論

正價金六拾錢 郵税金八錢

曹洞宗兩大本山貫首猗下題辭
曹洞宗大學長秋野孝道老師述

禪學五位要訣

正價金五拾錢 送料金六錢

總持寺獨住第一世諸琳奕堂禪師錄
曹洞宗總務藤田師珍藏久內大寶編

風外 鐵笛倒吹講話

美濃前入寇社木原傳名付一紙買取
上印圖解明 正價金五圓送料拾貳錢

「禪」雜誌編輯顧問 新井石禪師著

通俗 曹洞禪綱要

正價金參拾錢 送料金六錢

芳川祖眼師講述

金剛經註解

正價 金貳拾錢 送料六錢

西有禪師日置老師題辭
淺野老師序濱地八郎先生述

佛教世間篇

正價金五錢 送料貳錢

曹洞宗大學秋野孝道老師著

曹洞宗の安心

正價七錢 拾部以上五錢 送料貳錢

此書は、禪の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。此書は、禪の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。

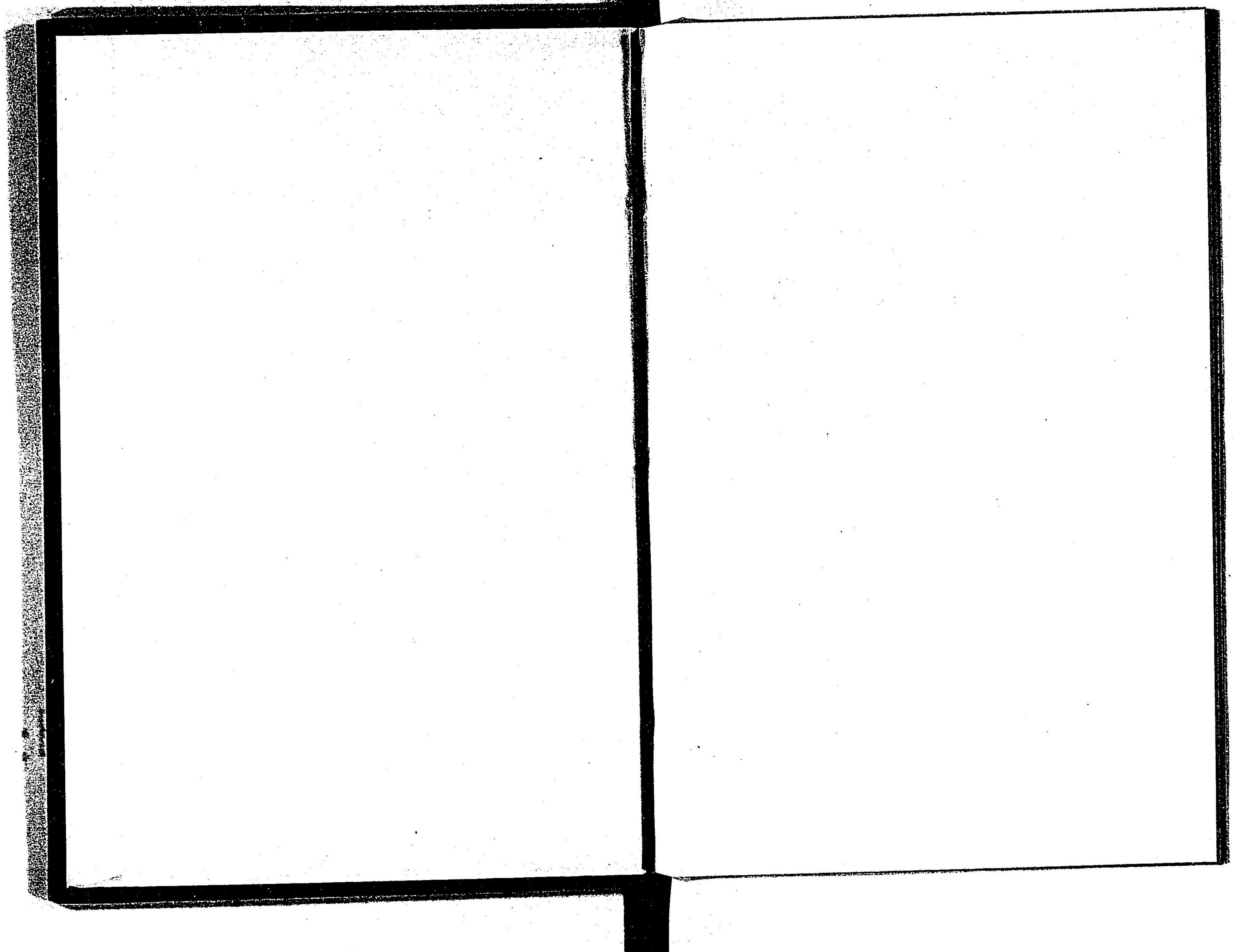
禪の根本は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。此書は、禪の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。

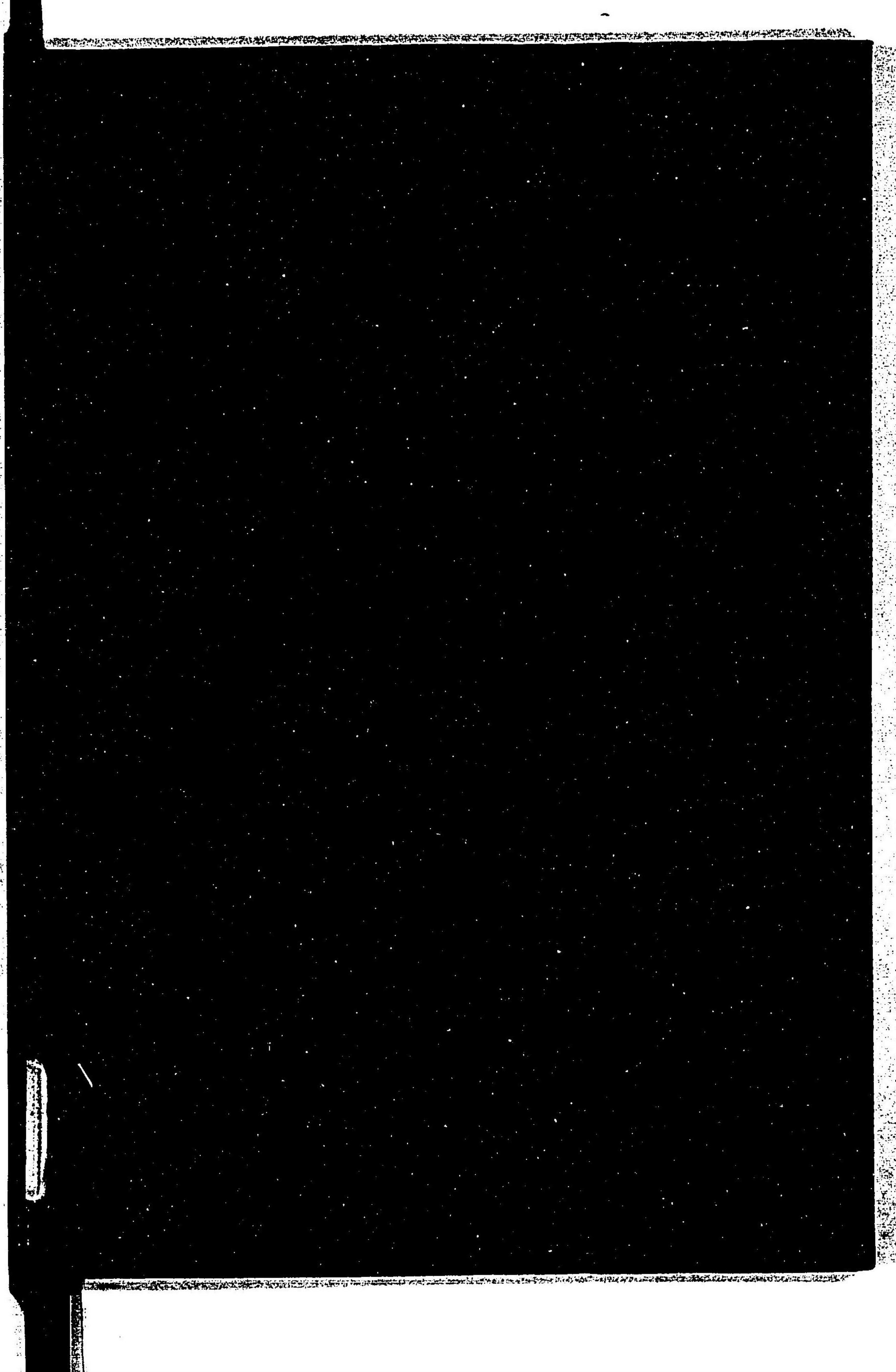
禪の根本は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。此書は、禪の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が禪の真諦である。

此書は、曹洞宗の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が曹洞宗の真諦である。

曹洞宗の根本は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が曹洞宗の真諦である。此書は、曹洞宗の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が曹洞宗の真諦である。

曹洞宗の根本は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が曹洞宗の真諦である。此書は、曹洞宗の根本を説き、其の源流を明かにし、其の修行方法を詳述する。其の要旨は、心は空しく、境は空しく、心と境と空しく、此が曹洞宗の真諦である。





324
292

019735-000-2

324-292

通俗信心銘講話

新井 石禪 / 著

M45.5

ABG-0540

